

ブラームス: 交響曲第1番

H. S.

2017.05.07-

目次

はじめに	3
第1章 作曲に関する経緯	4
1.1 背景	4
1.2 作曲過程	4
1.3 初演	4
1.4 出版	4
第2章 作品の構造	5
2.1 概観	5
2.2 第1楽章	5
2.3 第2楽章	5
2.4 第3楽章: <i>Un poco Allegretto e grazioso</i>	5
2.5 第4楽章	6
第3章 演奏と録音	7
3.1 初演から出版まで	7
3.2 19世紀ドイツ・オーストリアにおける受容	7
3.3 ヨーロッパおよびアメリカ	7
3.4 日本における演奏史	7
3.5 録音	7

はじめに

第1章

作曲に関する経緯

1.1 背景

1.2 作曲過程

1.3 初演

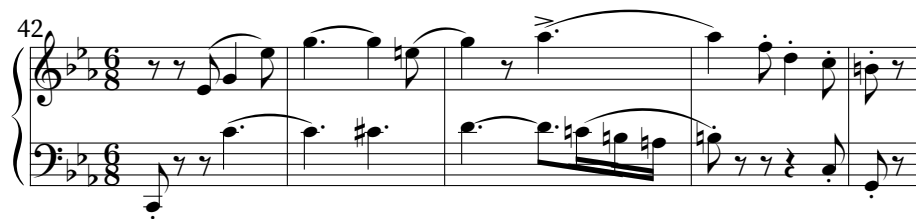
1.4 出版

第2章

作品の構造

2.1 概観

2.2 第1楽章



譜例 1: 第1楽章第42小節から

2.3 第2楽章

2.4 第3楽章: Un poco Allegretto e grazioso

ブラームスはこの大規模な交響曲の中で、164小節という小振りな「間奏曲」を用意した。ベートーヴェン風のスケルツォではなく、より古風なメヌエットのような音楽をここに置いたことは、ベートーヴェンの交響曲(例えば第5番)から意識的に距離を置いていることの現れであろう。しかも、この楽章は全体を通して二拍子で書かれており、純然たるメヌエットでさえない。この楽章は完全にブラームス風の音楽であり、この事実ひとつ取ってもブラームスの第1番が「ベートーヴェンの第10番」という評価では言い尽くせないことがよく表れている。

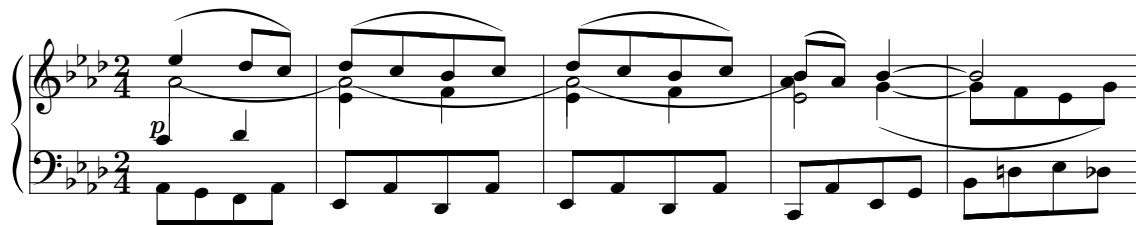
主部 (A)	中間部 (B)	再現部 (A')	コーダ
1-70	71-114	115-153	154-164
As-Dur, 2/4	H-Dur, 6/8	As-Dur, 2/4	As-Dur, 2/4 (6/8)

表1 第3楽章の構成

構成は比較的単純な三部形式 (A-B-A') だが、後で見るように再現部 A' は主部 A の単調な繰り返しとなることが避

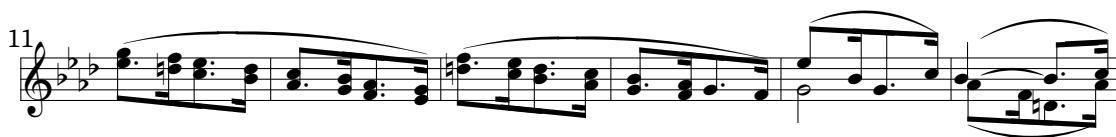
けられており、三部形式の短い楽章にしては変化に富んだ印象を与える。

Un poco Allegretto e grazioso



譜例 2: 第3楽章冒頭

第3楽章冒頭はまずチェロのピッチカートに乗ってクラリネットが優雅な旋律を提示する(譜例2)。ブラームらしく5小節を単位とする変則的な構造を取る。しかも、2拍子が5小節続くのではなく、2+2+3+3という変拍子である。続いて第11小節からフルートとファゴットが加わって下降音型を中心とする第2句を奏でる(譜例3)。こちらは冒頭のクラリネット(第1句)と異なり4+4小節の標準的な形である。第1句と第2句がこの楽章の基本主題を構成する。



譜例 3: 第3楽章第11小節から

第19小節から、やや拡大された形で両旋律が確保される。ここで依然として第1句は9小節単位という変則的な形を、第2句は4小節単位の標準的な形を保っていることは注目に値する。また、拡大部分である第29小節から第31小節にかけて、Vn2にこの曲の基本動機xがさりげなく登場している(譜例4)ことにも注意したい。



譜例 4: 第3楽章第29小節2拍目からの Vn2

第45小節でへ短調に落ち込むと、クラリネット、次いでフルートとオーボエに新しいリズムが出る(譜例5)が、これは前半は第2句、後半は第1句に基づく経過句である。



譜例 5: 第3楽章第45小節から

第62小節で変イ長調に戻ると第1句を再現するが、これはあっさりと流して遠隔調であるロ長調の中間部へと続く。ここで第65小節からの木管楽器の動きが第4楽章の第58小節や第295小節を思い出させる、と言うと穿ちすぎだろうか(第28小節および譜例4に関する上の記述と比較せよ)。

2.5 第4楽章

第3章

演奏と録音

3.1 初演から出版まで

3.2 19世紀ドイツ・オーストリアにおける受容

3.3 ヨーロッパおよびアメリカ

3.4 日本における演奏史

3.5 録音